共通教育英語への希望
－教員と学生へのアンケート結果報告－

尾　鼻　靖　子
高等教育システムセンター（内線　7134）
yakopoo@gipac.shinshu-u.ac.jp

要　旨

平成16年に信大の教員及び学生に対して行われたアンケートをもとに，データの分析報告を行う。共通教育の英語カリキュラムが18年度に向かって変わろうとしている。それに備えて，学生や現場の教師たちが今までの共通教育英語，また英語教育一般に対してどのような捉え方をしているのか，またどのような意見や希望があるのか，という生の声を聞いておく必要があると考えられたのでアンケートを施行した。

結果は，共通教育の英語をもっと総合的なカリキュラムにしてほしいという方向性が教員から聞かれた。学生からは，英語は重要であると理屈で思っているが，現状では使える英語につながっているように思われない。英語の学習はもっと役に立つ英語を学び，専門性と関連していくような目的ある英語科目のあり方がほしい，という気持ちが全学を通じて感じられた。教師に対しての意見もあったが，それにもましてカリキュラムのあり方が問われる結果であったと思われる。

キーワード

共通教育英語，使える英語，専門と英語，ESP，総合カリキュラム

1．はじめに

平成18年度に向けて共通教育の見直しがなされようとしている。

従来英語教育といえば，教える内容，教科書の選定，学期末にどれだけの量でどれほどのレベルアップを測れるのかは，まったく個人の教師に任されてきた。また，全国の大学の英語教育を調査しても，スキル別に各々の教師が自分の選択した方向で学生に科目を教えるというのが現状である。

クラスの進め方も教師が中心となって行う講義型が今も続いている。

このような日本の英語教育事情は，戦前，戦中時のオーディオリンガル法となんら変わりのない形態である。しかしこのオーディオリンガル法は集中的に毎日語学に浸かり，数週間で語学エリートを育て，敵国の言語習得を目指すという意味では，効果は抜群だったのである。語学クラスはまさに戦場であったのだろう。

しかし，時代は変わった。学生が自分で考え，積極的に学ぶ姿勢が教育全般に要望されている。英語教育も教育の一部であれば，学生が中心となって教師はナビ役，補助役としてクラスを進めるよう工夫すべきである。

さらに他の科目と異なり，語学というのは科目履修後も続けなければモノにならない，数年で使える英語にならない，という悲劇がつきまとう。だから，学習者のセルフ・モーティベーション（自己啓発）が最も問われる分野であろう。教師や大学が与えることのできる量はほんのわずかである。だから何を教えるのか，というよりはどのように教室で教えれば，一生続くモーティベーションを植えつけることができるのかのほうが重要である。そして英語はこのように学んでいけばいいのだ，という例をレッスンを通じて与えることで，科目履修後も自分で学んでいく姿勢を教えるほうが，限られた時間では学生には一番の教育であろうと思われる。

以上をふまえた共通教育の新英語カリキュラムの編成を期待したい。そこで，実際の教材開発にあたり，現場の声も聞いておく必要がある，と思われたので，以下のアンケートを施行した。

平成16年６－７月に，英語科目担当の教員に，そして続いて学生にアンケートに答えてもらった。アンケートの内容は文末に添付してあるが，教員向けのアンケートの主旨は２つあった。

(1) 現場で工夫している教授内容－教材開発にあたって参照するため
(2) 現状のカリキュラムについてどう思うか－統一カリキュラム施行が実際に可能かどうか調査するため

学生へのアンケートは次のような目的を持って作成した。

(1) 現状の英語教育に対してどう感じているのか
(2) 学生が希望する英語とはどんなものか
(3) 英語の内容はどのように工夫すれば学生が自己啓発しやすいものとなるか

この結果も教材開発に反映させるためである。

信州大学は前回の見直しで，他の大学に先駆けて，英語科目の取り扱いが改善された。たとえば科目の教える基準を設けたこと，TOEIC 分野を取り入れようとしたこと，評価の基準を設けたこと，TOEIC の取得点を単位認定に結びつけたこと，という点はこの1-2年で他の大学がようやく取り入れようとしていることである。

今回の「見直し」では，外枠だけではなく，さらに信大型の英語教育が提供されることを願っている。そのためにできる限りの情報と資料が必要であるという意味で，今回のアンケートはその意味でタイムリーなものであった。

２．教員へのアンケート結果報告

このアンケートでは38名の回答が得られた。回答率は常勤・非常勤の教員数全体を考えると半数を下回る。さらに自由記述が多すぎたせいか，意見がかなり広範囲に広がる結果となり，これを教員全体の意見の反映として扱うには問題がある。それは，個々の教師が担当する科目がリスニングだけであったりリーディングだけであったり，また日本人教師と外国人教師が別のスキル科目を受け持っているという点に由来する。自分の受け持つスキルの科目の観点からしか意見が出ないからであろう。

しかしながら，このようなデータであっても，どの教師にも共通した関心事がある。それ

をここで述べてみたい。アンケートの項目のうち授業の工夫とテキスト選択については教材開発時に利用させてもらうが，本稿の主旨からは外れるので割愛する。

(1) 教師から見た学生の英語能力について

現在スキル別になっているので，各教員が受け持っている科目において学生が直面している問題点をあげてもらうことで，現在の学生の英語能力を知ろうというものである。

Reading に関して（8人回答）

語彙や文法知識の欠落より際立つ問題点は，「長文から必要な情報を抽出できない」という点であろう。これは大きな問題点である。読むというのは全体から何が主旨でどこが重要なポイントなのか，を理解することだからで，一文一文訳す訳読法というのは真の意味で「読む」ということにならない。中学，高校で訳読法に終始しているとこのような結果を産むのだろうか。

Writing に関して（20人回答）

パラグラフの作り方が分からない。日本人発想で文を作る。基本的な能力に欠けるなど，かなり厳しい意見があった。クラスの人数が多いため（40人が定員というが実際は50人近く入っている）ひとりずつに作文指導ができない，という嘆きの声も聞かれた。書く以前に何について書くのかを考えることも難しい学生が多い，という意見もあった。シラバスで Academic Writing を目指すとあるが，学生の現在の能力と学習目的がかなりかけ離れていると言わねばならない。

Listening に関して（4人回答）

スピードについていけない。単語一つ一つ聞き取れないと全体の意味が分からない。この二つの意見は相関性がある。外国語であれば単語ひとつ分からなければもう分からない，と意識するのは，どの語学教育でも見られる光景である。母語話者であれば，6歳の子供は大人から言われている言葉のうち20％ぐらいしか実際には捉えられていない，といわれるが，結構受け答えができている。それは何故かというと，状況判断力と Inference（推論）をふんだんに駆使して想像たくましく聞こうとしているからだ，と心理言語学研究では言われている。それを語学教育でも利用すべく，工夫できるはずで，それに向かう教材開発が必要とされるのである。

Speaking に関して（12人回答）

ディベートに関する知識がない。学生同士で英語を使おうとしない。学生が反応しない。アクティビティの説明をしても英語が理解できないなど。

日本人同士で英語を話すのは気恥ずかしいのは当然である。学生が反応しないのは，失敗するとそれがクラスで晒しものになるからである。一番自我意識が強い多感な時期にこれ以上の恐ろしい経験はないだろう。日本人の教師もめったに英語を話そうとしないのに，学生

に外国人の教師には英語で話せ，というのは乱暴である。また，「話せ話せ」というが，情報や語彙，文法インプットが十分ないのに話すのは電池が充電していないのに器械を動かそうというのと同じくらい無理な話である。

(2) これからの英語科目への希望，センターへの希望など

TOEIC について

TOEIC 対策の授業にたいしては賛否両論に分かれるようである。カリキュラムに取り入れるべき（10人）という教員と反対（8人）でどちらともいえないが20人という結果であった。ただし，TOEIC 対策用の科目を別に設けるべきかどうか，という質問に対しては現行のあり方（3人）より，特別に設けるほうが良い（13人）と答えた人が多かった。

TOEIC やそのほかの能力試験への対策を大学で教えるという考えは，賛否両論がある。しかし時代の要求があり，TOEIC の得点が就職の時に有利に働くというのであれば，TOEIC を無視するわけにはいかない。だからといって全学生が Reading や Listening の時間に一斉に TOEIC 対策の授業を受けるというのはどうも語学教育から観点がずれているように思われる。

スキルを連携した授業を

延べ8人が Speaking, Listening, Writing, Reading のスキルが連携した授業となるように希望している。1年次で Writing がいきなり組み込まれていることに問題がある，と Writing を受け持つ教員のうち4人が述べ，他のスキルの科目との連携，順序だてたスキルの教授ができるように，という希望があった。

スキル別科目について反対は9人，賛成は4人。反対の理由として「教える側の論理で成立している」，「現行の方法では全てのスキルが中途半端になる」と述べる教員もいた。

スキル別科目がまったく悪いというのではない。ある条件が整えば，スキル別教授も効果を発揮する。たとえば，英語の授業が毎日のようにある，あるいは，英語圏で英語学校に通っているといった条件下でスキル別授業を施しても，一向に差し支えないのである。英語に絶えず触れている環境では，ある特定のスキルの強化が他のスキルにも効果を与えるからである。

しかし，信州大学のような環境ではスキル別教授で効果を上げるのはなかなか難しい。なぜならまず授業時間が非常に少ない条件下では，スキル別といっても1年を通じてやっと4つのスキルをカバーすることになる。また，学生の持つ英語のリソース（すでに持っている英語能力）が低いときにいきなり Writing を教えても，Writing はアウトプット能力であることを考えると無理が生じる。つまり教師が引きずっていく授業となり，学生の自己啓発の機会が与えられない。

総合カリキュラムとは，まずトピックによる Reading でそのトピックの情報，それに関連する表現（文法，語彙も含む）を習う。次にそのトピック関連の Listening を行う（Reading からの情報が触媒となって聞いて理解するのが無理なく行われる）。ここでイン

プットが完了する。次に同じトピックを使って，Speaking 最後に Writing へとアウトプットへと仕上げていく。さらに，学んだものが次のレッスンにモジュール形式につながり，らせん状に積み重ねていく。これが総合カリキュラムの概要である。今週はこれを教えて，来週はあれをやろう，というアトランダム的なものでは，学習者にたいして進歩の段階を築き上げることはできない。

さらに，トピックの情報や関連語彙，文法，表現が手中にあれば，話すことも書くことも最初は見よう見まねでコピーをするだけであろうが，それが学生の身につくと，今度は達成感となってモーティベーションが高まるのである。

また，総合カリキュラムであれば，トピックを中心にレッスンごとで何を学びどこまで達成するかを明示することができるので，学習プランも立てやすい。また，授業外でも調べてくることも明確にでき，学生同士で情報を交換させて，次の授業までにも英語に触れる機会を与えやすくなる。あるトピックを中核に４つのスキルを全て使って学習する形態が作れる。読んだもの聞いたものが，自分で表現するところへ持っていくように無理なく行っていくプログラムのスケジュールが必要なのである。習ったものを使う，という単純な進め方なのだが，それが確実な向上を遂げるのである。

その他，もっとクラスサイズを小さくしてほしい（８人），授業時間をもっと増やしてほしい（４人）などの希望もあった。語学教育ではクラスサイズは20人が妥当で，15人が理想と言われている。授業時間ももっとあればそれもうれしいが，現実はなかなかそのようにはいかない。現状の環境では「何を教える」とか「教える量」とかを考えるのではなく，学生に「英語の学習の仕方」をしっかり教えること，セルフ・モーティベーションを高める授業を施すこと，といった面に努力を注ぐ英語教育に進むしか方法はないと思われる。

３．学生へのアンケート結果報告

１年次及び２年次の学生にアンケートを施した結果，回答率は約50％の2041人であった。

(1) 英語教育でどんなトピックを選べばよいか

新しいカリキュラムでは，バラエティのあるプログラムを目指す。その場合，学生がどのようなトピックに興味があるのか，知る必要があると思われたので，アンケートの項目に組み入れた。Table 1 は「共通教育の英語科目で扱うトピックで興味あるものを選んでください（複数選択可）」という質問の結果である。選択トピックは市販の教科書をアトランダムに50冊選び，そこでよく扱われているトピックを抜き出した。

Table 1：どんなトピックを扱ってほしいか？

順位	医学部（244人）		理学部（276人）		農学部（236人）		繊維学部（270人）	
1	映画	112	映画	98	環境問題	121	映画	112
2	スポーツ	85	スポーツ	89	映画	91	スポーツ	108
3	恋愛	74	環境問題	88	スポーツ	76	環境問題	66
4	健康	68	現代の科学	76	料理	68	宇宙 UFO	53
5	料理	57	宇宙 UFO	75	動物保護	66	ファッション	50
6	ファッション	50	歴史	57	健康	50	趣味	48
7	歴史	37	趣味	56	歴史	48	戦争	45
8	旅行	37	動物保護	53	恋愛	47	犯罪	44
9	人生	37	古代・考古学	52	宇宙 UFO	45	料理	44
10	結婚	36	恋愛	50	美術	45	現代の科学	44

順位	工学部（470人）		経済学部（153人）		教育学部（331人）		人文学部（134人）	
1	スポーツ	207	映画	55	映画	161	映画	76
2	映画	182	スポーツ	48	スポーツ	155	コミュニケーション	40
3	環境	117	経済問題	38	恋愛	105	スポーツ	39
4	宇宙 UFO	108	犯罪	36	料理	88	歴史	36
5	コンピュータ	105	環境問題	35	コミュニケーション	85	メディア	35
6	戦争	91	心理学	34	ファッション	84	犯罪	34
7	趣味	90	メディア	32	心理学	82	文化	33
8	料理	82	戦争	29	健康	80	世界の言語	33
9	恋愛	80	キャリア・職業	26	人生	78	ファッション	32
10	犯罪	74	国際化	25	趣味	75	旅行	31

Table 1 を見ると，全体としては現代の若者が興味を示す方向が一定している面と，各学部ごとで特徴ある興味の対象とが混在していることが分る。つまり，全学的に「映画・スポーツ」がいずれもトップの項目に上がっているが，続く項目には各学部の専攻関連に近いものが挙がっている。例えば，

医学部・・・・「健康」（4位）
理学部・・・・「現代の科学」（4位），「古代・考古学」（9位）
農学部・・・・「環境問題」（1位）
繊維学部・・・「環境問題」（3位），「ファッション」（5位）
工学部・・・・「宇宙 UFO」（4位），「コンピュータ」（5位）

経済学部・・・「経済問題」(3位),「犯罪」(4位)
教育学部・・・「コミュニケーション」(5位)
人文学部・・・「コミュニケーション」(2位),「文化」(7位)

というふうに，学部の特徴を表すトピックの選択をしているのである。

これは，学生の生活に密着したもの（趣味や日常起きること，勉強）を表している。語学教育では，最初に自分のこと，自分の周りのこと，そして自分を取巻く世界，最後は自分を離れた抽象的なこと，というトピック選出の順は，学習者の語学レベルが上がっていく過程も示していると言われている。信州大学の学生の語学レベルを考えると，学生の生活の周りで起きているトピックの方が学習しやすいのではないか，と思われる。それは，学生の専攻する分野も含む。英語とは特別な知識のための科目ではない。生きた使うツールである。学生が普段触れている，なじみのあるもの，興味のあるもの，など日本語で表現していることを，英語でも表現できるようになれるという主旨で，カリキュラムの開発がなされることを期待する。

ただ，専門分野を扱うといっても，「専門分野に関連するトピックを扱ってほしいですか」という質問には，賛否両論に分かれるのである（Table 2)。

Table 2：専攻分野に関連するトピックを扱ってほしいか

	繊維	農学	理学	医学	教育	経済	工学	人文	合計
Yes	72	141	128	119	159	61	169	51	900
No	182	91	141	119	164	84	286	78	1145

この質問は専門分野を英語でするという意味ではなく，専攻分野に関連したトピックのことであるが，Yes と答えた学生が例として出したトピックはかなりシリアスなものが挙げられていた。Table 3 では，トップ2項を挙げる。これは自由記述である。

Table 3：（専攻関連分野の）どんなトピックを扱ってほしいか

順位	経済学部	教育学部	農学部	繊維学部
1	日本と世界の経済	世界の教育制度	バイオテクノロジー	繊維産業関係
2	法律	世界の教育問題	食料問題	最新科学技術

順位	医学部	理学部	工学部	人文学部
1	現代の医療制度	環境問題	建築	心理学
2	先端医療	宇宙物理学	自動車	世界・日本の文化

（注）この表では，各学部におけるトップ2しか記述していない。各学科ごとで分けるとかなり具体的なトピックが挙げられている。例えば理学部では，数学関連項目，化学関係，生命と動物，地質関係，自然と環境など，学科ごとでかなり異なったトピックが挙がっている。

Tables 1-3 から，英語教育でどんなトピックを扱うべきか，という問いに対して，次のように提言できる。学生の生活の身近なものを取り扱いながらも，大学で学ぶ専門分野に少しずつ近づくものも取り入れていくことが適切であると。専門分野といっても，共通教育の段階であるから，たとえ専門外の人が学んでも十分ついていけるものに限る。興味を引くトピックというのが主旨であるから，情報工学の学生であればコンピュータには興味があるだろうし，化学専攻の学生は化学関係のトピックに飛びつくであろう，という程度のものである。プレゼンにしても，教師の趣味で選んだり，何をトピックにしてもいい，という授業もあるようだが，医学部の学生にはやはり医学関係のトピックを扱うようにしたいものである。

このトピック選択の方向性は，学生の興味を引きつけるのが第一の目的であるが，さらに学生に「英語とは自分を表現するツールである」と気づかせる目的もある。英語を日常と離れた「科目」として捉えるのではなく（理屈では分かっていても，授業の進め方がそうでないと，結局「科目扱い」をするようになる），自分が今面白いと思うこと，考えていること，学んでいることを英語で表現するのだ，という Awareness Raising を確立させるためである。この Awareness Raising という用語は第二言語習得の研究ではよく使われるが，学習者が学んだものを，関連性，目的，理由，などをしっかりと意識的に理解しながら学ぶことをいう。セルフ・モーティベーションの基本といえよう。

(2) 現行の英語教育についてどう思っているか

「英語が選択制になっても履修したいか？」という質問をし，そして履修したい・したくない理由を自由記述で書いてもらった。Table 4 がその結果を示している。

Table 4：英語が選択制になっても履修したいか？またそれは何故か？

履修したい・・・1424人		
理由	1	将来必要・重要だから・・・・・・・・・657人
	2	上達したい・話せるようになりたい・・62人
	3	好き・興味あるから・・・・・・・・・・54人
	4	国際語だから・・・・・・・・・・・・・49人
履修したくない・・・617人		
理由	1	苦手・興味ない・・・・・・・・・・・・248人
	2	この授業では力が付かない・ 使える英語を目指していない・・・・・76人
	3	他言語を習いたい・・・・・・・・・・52人

60%以上の学生が選択制になっても英語を履修したい，というのは語学担当の筆者にとってはうれしい結果である。たとえそれが Instrumental Motivation という目的志向型のモーティベーションであってもである。それが面白い，もっとやってみたい，というモーティベーションにつながらせる責任は我々教員にある。またカリキュラム作成にも大きな要因がある。

履修したくない理由としては，想像したとおり苦手，興味ないというのがトップに出た。共通教育では，ゼミや講義など履修単位数は決まっていても何の講義を取るかは選択制となっている。筆者の個人的な意見では，語学も選択制にして英語以外に他の言語も受けられるようにしたいと思うのだが，何故かほとんどの大学で英語は必修となっているのである。「他言語を習いたい」というのが三番目の理由であってみれば，将来他の言語が学べるような環境作りも必要ではないかと思われる。

問題はトップ2の現状の英語の科目に不満がありそうな意見が履修したくない理由となっている点である。アンケートの最後に「現在の共通教育英語科目を受けていて特筆すべきこと」として自由記述をしてもらったが，ここにこの理由と関連する例が挙がっている（Table 5)。

Table 5：現在の共通教育の英語について特筆すべきことは何か？

1	余り役に立たない	47人
2	高校の延長で面白くない	24人
3	教師がダメ・教える気がない	12人
4	もっと授業数が必要だ	9人
5	クラスごとで習っている事が違うのは良くない	7人

とはいえ，教師がいいと答えた学生もいる（6人)。また良い授業だったという意見もあった（9人)。

その他自分の受けている授業の細かい点を述べている例もあったが，ここで問題にしたいのは，Table4と5に表れている「役に立つ授業をもっと習いたい」という希望が学生にあるという点である。もちろん全ての学生が満足する授業というのはない。教師との相性なども微妙に関連してくる。しかし，学生の方で英語を積極的に学びたいと思っている，少なくとも重要視しているのであれば，教師側はそれに応える授業を施すべきであろう。また高校の延長ではなく，使える英語を目指して，大学側がカリキュラムを改善すべきであろう。

(3) どんな英語を学習したいか

ここでは学生がどのような英語を習得して使えるようになりたいのか，またさらにどんなプログラム（特に目的化した英語のプログラム，つまりESP (English for Specific Purpose)）を希望しているのかを調査した結果を示す。

Table 6はどのような英語能力を望むのかを調査したもの，Table 7は将来新しいプログラムが企画されたらどれを選択したいのかを調査したものである。少し重複している部分もあるが，前者はこれから教材開発をしていく上でどのようなカリキュラムの内容を組み込むのかを考える上で役に立つ情報がほしかった。後者では実現可能であろうと思われるプログラムを提示し，それに学生が興味を示すかどうかを調べたかった。

Table 6では6項目からひとつ選んでもらった結果である。各学部で少し順位が入れ替わ

っている項目もあったが（例えば人文学部や繊維学部では留学向きの英語のほうが専門英語より順位が高いが，工学部や理学部ではこの逆であった），大体において「日常会話ができるようになりたい」がトップで，次に「専門について英語で表現したい」が2位を占めている。次に「留学に向けて困らない英語を身に付けたい」が3位を占める。

Table 6：どのような英語を習得して使えるようになりたいか？

ターゲットとなる英語	繊維	農	理	医	経済	工	人文	教育	合計
日常英語が使えるようになりたい	128	117	120	138	84	242	79	224	1132
専門について英語で表現できること	54	47	83	35	10	88	8	18	343
留学で困らない英語力を身につけたい	128	28	31	34	13	49	25	30	338
TOEIC で高得点を取りたい	33	16	12	5	28	50	10	15	169
外書購読ができればよい	6	12	16	13	6	14	5	13	85
教養程度でよい(使えなくてもよい)	6	7	6	9	2	7	2	16	55

この結果は Tables1-3 で得られた結果と矛盾することなく一貫した学生の声が聞こえるものとなった。学生自身の日常生活，大学生活を英語で表現したい，という点である。留学も短期であれ長期であれ，いつかは行きたいと希望を持ちながら，自分のこと，自分の周りを取り巻くものを別の言語で表現したいという欲求があるのである。

次は，具体的なプログラムの選択の結果である。

Table 7：もっと英語を学習する機会があったらどんなことに参加したいか？

プログラム例	医	工	人文	理	農	繊維	経済	教育	合計
国内留学	100	162	62	91	68	32	24	153	692
TOEIC 対策講座	6	157	44	88	58	43	46	9	451
英語での講義科目	63	132	16	106	63	27	12	60	479
インターネット英語	38	93	23	45	31	35	16	54	335
ビジネス英語	21	103	27	26	33	19	25	37	291
短期留学	131	222	90	124	104	90	64	177	1002

質問には二つ選んで順位を1,2と書き込んでください，とあったにも関わらず，多くの学生が二つあるいはひとつだけ選んで丸をつけていたので，述べ数を表に表した。

短期留学は，信州大学が主催する形のものとして実現したいと思う。例えばすでに医学部保健学科で毎年短期留学を企画実行しているが，それに似たようなプログラムが全学的にできないだろうか。これの単位制も認めて，海外で同じ専攻をしている学生と触れる機会があれば理想的である。

国内留学とは，合宿形式の英語集中研修のことである。グループプロジェクトや，スピーチ大会，映画鑑賞とディスカッションといった企画をスケジュールに組み，合宿中は一切日本語を使わないというものである。例として白馬のペンションで教師と一緒に一週間を過ごすというのをあげておいたが，希望者が短期留学についで多い。国内留学は筆者が将来ぜひ実現したいプログラムである。海外留学ができなくても夏休みにこの信州の大自然の中で英語にどっぷり浸かって，楽しく研修するのを夢みているのだが，学生も希望数が多いようであるから，信大の英語プログラムに加えたい。

英語で講義を受けるというのもなかなか希望者数が多い。将来，各学部への支援として実現してみたいプログラムである。

TOEIC への希望は共通教育英語に対してはそれほど目立たなかったのだが，夏休みなどを利用して集中して受けるという例を挙げておくと，希望する学生が結構いると分かった。これは特に科目としなくても対策講座として一週間ぐらいの集中講座を設けるのも一案であろう。

インターネットで学ぶ英語というのは e-Learning の普及に関してどう捉えるかが目的であったが，現代の若者はコンピュータに対しては何の恐れもないからか，この希望も高いことは念頭においておくべきであろう。

4．まとめ－これからの英語－

教員と学生へのアンケートから得られた結果は，これから開発する英語プログラム及びそれぞれのカリキュラムの統一化するときに役立てればと思う。

カリキュラム全体について筆者の意見をまとめると，次のようになる。まず英語プログラムは一般英語以外にも ESP プログラムを用意するほうが良いだろう。目的にあったプログラムを用意するのは，ひとつのプログラムに全てを盛り込むことは不可能だからである。例えば，TOEIC の試み自体は時代の要求に合わせた適切な考えであるが，それを一般英語の中に組み込むには無理がある。TOEIC は英語能力が高ければ自然に高得点が取れるのだが，大学入学当時の英語能力では TOEIC の対策を直接習うほうが近道だからである。一方一般英語は地道な一歩一歩進むプログラムである。プログラムごとに目的をはっきりと定めた内容のほうが結局は効果がある。

次にカリキュラムの構成は，一般英語を基本にしながらも，各学部・学科の専攻に関連した興味を引くトピックを組み入れ，さらにトピックは学生が興味を持って学習するものであることが理想であろう。

授業の進め方は学習者中心のものであること。教師が講義をするのではなく，教師はナビ役を演じ，学生に授業でも授業外でも活動させるものであること。それには週ごとのレッスンプランが学習者中心型の授業が実現しやすいものであること。

授業には英語をもっと使用する機会があること。日本人教師の方にも学生のモデルとなるよう，せめて教室英語（決まり文句など，教室で絶えず使う英語）は使ってほしいと思う。

学生同士で英語を話す機会を多く作る授業形態であること。教師は教壇から見下ろしている90分ではなく，学生の間を絶えず行き来する，学生同士の活動（アクティビティという）

のナビ役として動く授業であること。

将来への希望も持って信州大学の英語教育を充実できる方向に支援したいと思う。国内留学，短期留学制度，英語による講義の実施（共通教育では中期目標の中にすでに掲げてあるが，各学部への支援も将来考慮したい），など夢は果てしなく広がる。できる限りの支援が可能になればと願っている。又同じ方向を目指す人が増えてくれれば，と思っている。